

マクロスF ～キボウノウタヲキケ～

春原

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

劇場版ラストで一人残されてしまったランカちゃんが本当に不憫でランカちゃんを幸せにするための自己満足小説。

劇場版準拠ですが、TVアニメ版や漫画版の良いところ取りや、自己解釈、原作改変などが多々あります。何でも許せる方向け。

※この作品ではアルシエリ、ブレランを前提にしています。ご注意ください。

目次

| | | |
|-----|------------|----|
| 第1話 | 銀河の妖精 | 1 |
| 第2話 | ファーストコンタクト | 4 |
| 第3話 | 襲来 | 8 |
| 第4話 | エンカウント | 15 |
| 第5話 | 運命の交差点 | 21 |
| 第6話 | ミス・マクロス | 26 |

第1話 銀河の妖精

かつてゼントラーディとの戦争の末、滅びの危機を経験した人類は、種の存続のため新天地を求め大宇宙へと進出する。西暦2059年。数えて25番目となる巨大移民船団マクロスフロンティアは、銀河の中心宙域に向けて、大航海を続けていた。

そして今、星の海を越えて、一人の歌姫がこのフロンティアに舞い下りようとしていた。

アナウンス「ー当機は間もなくミリア・ジーナス宙港に到着いたします」

グレイス「シェリル。ほら、起きて」

シェリル「ん……」

シェリルはグレイスに促され窓の外に目をやる。

グレイス「あれがツアー最終目的地、フロンティア船団よ」

数ヶ月前、銀河音楽アカデミー賞の授賞式の中で、シェリルはある大々的な声明を発表した。

シェリル「銀河の妖精シェリル・ノームの伝説はまだ始まりに過ぎないわ！あたしは今ここで皆さんに、今まで誰も成し得なかった銀河横断ツアーを成し遂げることを宣言するわ！」

インプラント化せず、生身の身体である彼女にとって他船団への移動は身体的負担が大きく、危険なものであったが、なによりも銀河中の多くのファンに自分の声を直に聴いてもらいたいという強い思いがあった。

ツアーは着々と成功を収め、フロンティア船団でのライブを残すのみとなった。そしてこのツアーにはもう一つ目的がー。

グレイス「覚悟はいい？もし、ここにもターゲットが見つからなければ、あなたは……」

シェリル「ふふ、グレイス、シェリル・ノームはいつだって、どんな時でも、全力で歌う。それだけよ」

シエリルの耳を飾るイヤリングが煌めいた。

——超時空飯店 娘々

ランカ「ホントに☒シエリルのチケット取れたの☒」

この店でアルバイトをしている少女、ランカ・リーは仕事にもかかわらず、興奮して机に身を乗り出すカタチになっていた。

アルト「あ、ああ。ライブのパフォーマンスでミシエル達と飛ぶことになってな、そのツテだ。少し遅くなって悪い。俺からのバースデープレゼントだ」

ランカ「わああ!」

彼女の喜びに呼応するように深緑の髪が動く。それは彼女がゼントラーデイの血を引いているためである。

チケットを受け取ると、クルクルと回り、全身でも喜びを表現した。ナナセ「良かったですねランカさん!」

ランカの親友である松浦ナナセは、まるで自分のことのようにランカと共に喜んだ。

ニユースではちょうど銀河の妖精シエリル・ノーム来訪の様子が映し出され、明後日のライブに向けた意気込みが語られていた。

ランカもこのライブを見に行くつもりであったが、チケットはゼントラ級の速さで即完売。もう行けないものだと言っていたのだ。

ランカ「もう絶対無理だと思ってた…。ありがとね!お礼に特製マグロ饅頭サービスしてあげる!」

ランカが蒸籠を開けると、マグロ饅頭が二つ美味しそうに並んでいた。

アルト「おう」

アルト「…って、ランカ!その持ち方止めろって前にも…!」

ランカが掲げる位置や形状的にマグロ饅頭がバーストに見えてしまったアルトは慌てて目をそらす。

ランカ「あ…ご、ごめんね」

アルトの反応を見て、ランカは自分のしたことに気づき、恥ずかしさでいたたまれなかった。

店長「二人ともいつまで油売ってるの！早くこっち手伝って！」
厨房からランカとナナセを呼ぶ声が聞こえる。

ランカ「は、はい！今行きます！」

：じゃあアルト君、チケツトありがとね！パフォーマンスも頑張つて！」

去り際にウインクをしてランカはまた仕事に戻っていった。

——ライブ会場 星道館

シエリル「だからその照明の色はブルーにしてちょうだいって言ったでしょ！それからそっちはもつと明るく：ああ、違う！その色じゃなくて：！」

ライブを1日前に控え、シエリルは自ら会場へ赴き照明や音響の指揮をとっていた。その少し離れたところではアルト達が明日のパフォーマンスの段取りを確認している。

アルト「(銀河の”妖精”か：あれじゃ妖精というより女王様だな：)」

そう内心呟いていると、シエリルとバチリと目が合ってしまった。シエリル「ちよつとグレイス、ステージ裏にフアンの学生なんて入れないでちょうだい！まったく：警備も何をやってるんだか：」

グレイス「あら、彼らは今回のステージでアクロバット飛行をしてくれるパイロット候補生の子たちよ」

シエリル「あつそう、要するに素人ってワケね」

アルト「なっ：！」

突っかかろうとするアルトをミハエルが抑えつける。

シエリル「せいぜい私の邪魔にならないよう、控えて飛ぶことね。

まあ：フアンには私以外、目に入らないでしょうけど」

アルト「なんなんだよっ！アイツ：！」

第2話 ファーストコンタクト

——翌日、シェリルのライブ当日

ランカ「やばいやばい！完全に遅刻だよお…」

ランカは走っていた。

全然知らない道をただひたすらに。

人が混み合う公共機関を避け、あまり使わない抜け道を利用したことがあだとなり、迷子になってしまったのだ。行けども行けども会場らしき建物は見えてこない。ランカは携帯の時刻に目をやる。

ランカ「どうしょ…あと10分しかないよ…」

ランカ「わっ…！」

携帯に気を取られ、前方を見ていなかったランカはぶつかった拍子に尻餅をついてしまった。

ランカ「いたた…」

「オイ…どこ見て歩いてやがる」

運が悪いことにぶつかった相手は見る限りにガラの悪そうな大男であった。

ランカ「ご、ごめんなさい…」

大男「嬢ちゃんなかなかカワイイ顔してんじやねえか…ちよつとコツチ来やがれ！」

大男に強く腕を掴まれる。

ランカ「いたっ…は、離して！」

抵抗するものの、力の差で勝てるはずもなく、どこかへ連れ去られそうになったその瞬間——

どこからともなく現れた鳶色の髪 of 青年が大男の腕を振り払い、ランカを解放した。

大男「テメエ…なにしやがる！」

青年「…こつちだ」

青年がランカの手を引いて走り出す。その後を大男が追っていた。

大男の追跡から逃れている間ずっと、ランカは繋がれた手に妙な懐かしさのようなものを感じていた。

しばらくして二人は大男の追跡を振り切ることに成功する。

青年「ここまで来ればもう安全だ」

肩で息をするランカに対し、青年は涼しい顔をしている。

あれだけ走っていたというのに汗ひとつ掻いていないのが不思議であった。

ランカ「あの…さつきは助けてくれてありがとうございます」

青年「礼はいい。それより…急いでいたんじゃないのか？」

ランカ「え」

ランカは先ほど繋いでいなかった方の手の中で握りしめていたチケットの存在を思い出した。

ランカ「ああ！そうだった！シエリルのライブく〜!!ど、どうしよ、もう始まっちゃう！」

ランカは火がついたように慌てふためきだす。

青年は少し考える素振りを見せたあと、ランカを抱え上げた。

ランカ「ふえ!?!」

突然宙に浮く感触にランカは素っ頓狂な声を思わずあげてしまう。

青年「俺がお前を会場まで送り届けてやる」

しっかりと掴まっている。そう指示され、戸惑いながらもランカは大人身しく従う。

そして青年は遠隔操作により赤紫のバルキリーを呼び出すと、ランカと共にその機体に乗る込む。

そして目的地である星道館へと勢いよく飛び立った。

青年「着いたぞ」

機体はものの数分で星道館の目の前へと辿り着いた。

ランカ「すごおい…あつという間に着いちゃった…」

青年「さあ。早く行け。もう始まるぞ」

ランカ「あ、待って！私、ランカ・リーつています！今日は本当にありがとうございます！」

ランカ「えーつと…そうだ！お礼！今度お礼したいです。私、娘々って店でバイトしてて——」

青年「礼などいいときつきも言ったぞ」

ランカ「あう…じゃ、じゃあ名前！せめてあなたの名前だけでも…！」

青年「…ブレラ。ブレラ・スターンだ」

それだけ言い残し、ブレラはランカのもとを去っていった。

ランカ「ブレラさん…か。なんだか不思議な人。初めて会ったはずなのに、まるで…」

そこまで言いかけて、ランカの脳裏に何かがフラッシュバックする。

ランカ「なに…今の？」

ランカは気を取り直してライブ会場の中へと入っていった。

「あら、シンデレラのエスコートはどうだった？魔法使いさん」

ブレラ「…大佐…」

振り返った先にはシェリルのマネージャーであるグレイス・オコナーの姿があった。微笑みを浮かべていたその表情はすぐさま、冷たいものに変わっていく。

グレイスはシェリルのマネージャーであると同時に、ブレラの上官でもあった。

グレイス「偵察の戻りが遅いと思ってみれば…こんなこととは」

グレイスは呆れたとぼやいてみせる。

グレイス「アンタレス1、お前のこの船団への随行を許可はしたが、外部の者との接触は許可した覚えはない。それが仮に妹であったとしてもな」

ブレラ「…申し訳ありません」

グレイス「あの娘にはすでに過去は無く、新たな家族と新たな環境がある。今更お前が出てきたところで、お前のつ入り込む余地などない」

ブレラ「……」

グレイス「わかつたらすぐに持ち場に戻れ。今後勝手な行動は禁ずる」

ブレラ「…了解」

「憐れなものねえ。王子様にでもなったつもりなのかしら」

「ただの我々の操り人形だということも知らずに」

「 電脳空間に響く複数の声。これらはインプラント・ネットワークと呼ばれる視聴覚データ運用技術を用いてグレイスの脳に直接語りかけられている。」

「グレイス大佐、彼にはもう少し調整の必要があるんじゃないのか？」

グレイス「いいえご心配無く。あの娘がいる限り、彼には素晴らし
い働きが期待出来るでしょう。そのために記憶の一部を残してある
んですから」

グレイスは不敵な笑みを浮かべてみせた。

第3話 襲来

星道館にはびっしりと観衆が押し寄せ、銀河の妖精のライブを今か今かと待ちわびていた。

やがて、スクリーンには多言語で文字が表示されていく。

「はじめに歌ありき」

「星々は歌う、まるで天界の音楽を奏でるように」

かつて銀河に名を馳せた、リン・ミンメイやシャロン・アップ、ファイーボンバーらの名だたる面々が写し出され、そして、画面は大きく2059を表示して、照明が落ちる。

シエリル「あたしの歌を聴けーっ！」

その掛け声を合図に巨大な歯車の舞台装置が回転を始め、『ユニバーサル・バニー』が流れ出す。

サーチライトに照らし出されたシエリルが歩き出し、ゼンマイ仕掛けの人形が踊り出す。シエリルの登場に会場は興奮で沸き立つ。

ランカ「デ、デカルチャー!!」

初めて生で見るシエリル・ノームに感動し、ランカは身を乗り出す。

ミハエル「すごい熱気だな。これが銀河の妖精か…」

アルト「……」

バックステージで出番を待つミハエル達は、その様子を見て思わず感嘆の声を漏らす。しかし、アルトは何か別のことを考えていたようで静かに目を細めていた。

ミハエル「どうしたアルト？シエリルにアマチュア呼ばわりされたこと、根に持ってるのか？心配しなくてもお前の腕前なら——」

アルト「別に。そろそろ出番だろ、俺たちも行くぞ」

ミハエルは小さく溜息をつく。

ミハエル「おいおい勝手に先導すんなって。リーダーは俺だぜ？」

2曲目の『My Fan Club's Night!』のイントロにあわせ、星道館会場の上空で、ステージ中央へ進む色とりどりの光

の帯が5つ。アルトやミハエル達のアクロバット部隊である。

ランカ「あ！アルト君たちだ！」

ランカが手を振ると、それに気付いたアルトは小さく微笑んだ。

ミハエル「お前ら！歌に聴き惚れてトチるなよ！アツプワードエアブルーム！」

アルト「（それはお前だけだろ）」

内心ツツコミを入れつつ、急上昇したアルトは空中に光の螺旋を描くように飛び出し、光の粒子が会場へ舞い降りる。

ランカ「わあー！キレイ！」

ランカはその美しさに思わず手を広げた。

空中ステージで歌うシェリルにスポットライトが当たる。シェリルは銃を構えると、旋回飛行するアルトに狙いを定め、大きなハートの光弾を発射する。

アルト「!?？」

光弾を避けたアルトに対し、シェリルは挑発的な笑顔で銃をクルリと回してみせた。

アルト「…ふぎげやがって！」

体勢を直したアルトはシェリルに向かって突撃する。

ミハエル「あのバカ…!!? 簡単に挑発に乗りやがって!!?」

シェリルはステージの端、飛び込み台のような細い場所まで走り出し、そこから勢いよく飛び降りた。

アルト「なっ…!!?」

落下していくシェリルにギョツとしたのはアルトだけではなかった。

ランカ「うそッ…!!?」

観客全員が息を呑んでその光景を見つめていた。

アルト「うおー！ー！ー！」

落下していくシェリルを追って急降下したアルトは、空中で彼女を受け止める。

アルト「お前何てことをッ！」

シェリル「しっ。黙って」

シエリルは抱きかかえられたまま、アルトの口元を指でふさぐ。
シエリル「このままもつと行くわよ！」

アルト「……はあく……たく！」

仕方なくアルトは歌うシエリルを抱えたまま、飛び上がる。

ミハエル「ヒヤつとさせやがって……全機！二番機をフォロー！」

アルトを中心に集まった部隊は何事も無かったかのように見事な
フォーメーションで旋回をする。

ランカ「なあんだ、演出だったんだ。良かったあ〜」

その様子を見て、ランカは安堵の表情を浮かべた。

アルト「ステージから飛び降りるなんて……何考えてんだ！」

星道館の天井部のデッキに着地するなり、アルトはシエリルに食っ
て掛かった。

シエリル「決まってるじゃない。演出よ、演出」

アルト「ふざけるな！もしオレがあと一歩でも遅かったら、お前だ
けじゃなく観客だって！」

シエリルは鼻で笑う。

シエリル「予測可能な人生なんて何が面白いの？あたしはもつとス
リリングに歌いたいだけ」

アルト「なんだと！」

シエリル「あたしは出来る限りとことん観客を楽しませたい。……ほ
ら、聞こえるでしょ？」

会場では鳴り止まないシエリルコールが聞こえてくる。

シエリル「あたしのライブに来て、みんなにサイコーだったって気
分になってもらいたいだよ！……それにほら」

スカートを急にめくり上げるシエリルにアルトはたじろぐ。

アルト「ガ、ガスジェットクラスター!?」

アルトの反応にシエリルは堪えきれず吹き出す。

シエリル「バカね、アマチュアなんか命を預けるわけないじゃな
い」

アルト「くっ……」

アルトは唇を噛みしめる。

シエリル「さあ、さつきと次の曲行くわよ、みんながあたしを呼んでるわ」

その瞬間、照明が点灯し、会場が大きく揺れる。

シエリル「な、何!?!」

けたたましいサイレンの音が鳴り響き、会場のホログラム映像が次々と艦内放送へと切り替わる。

艦内放送「避難警報発令。避難警報発令」

それはライブ会場だけではなく、サンフランシスコや渋谷の街中でも放送され、人々は足を止め、モニターを見上げた。

艦内放送「市民の皆様は、速やかに最寄りのシエルターに避難して下さい。これは演習ではありません。繰り返しします——」

グレイス「来たわね。アンタレス1、フェアリー9の回収に迎え」
ブレラ「了解」

観客「避難って:?!?!」

観客「まじかよ!?!」

警備員「皆さん慌てず落ち着いて、こちらへいらしてください!」
客席で動揺する観客たちを警備員が順に誘導していく。

ミハエル「——了解!直ちに戻ります!」

通信を切ったミハエルがアルトやルカに向き直る。

ミハエル「ミツシヨンコードビクターだ!」

ルカ「コード『ビクター』:それって隊長が言ってた例の☒」

ミハエル「アルト、お前はシエリルを連れて先に避難しろ!」

アルト「わかった!」

シエリル「避難ですって!?!?私のライブはまだ始まったばかりなのよ!…きや!」

たまらず抗議の声を上げた直後、再び会場が激しく揺れ、シエリルがよろめく。

後ろからアルトがそれを支える。

アルト「そっちは任せた!」

ルカ「はい！」

ルカとミハエルはその場を引き上げた。

アルトはシエリルに下で待っているように伝え、天井の非常ハッチから屋外に出る。空を見上げると、大窓越しに宇宙戦闘が写し出されている。

シエリル「何なのよ、これ……」

背後から下で待っていたはずのシエリルが息を呑む音が聞こえる。

アルト「バカ！ここは危険だ、早くシエルターに避難を」

シエリル「！」

大きな音に驚いて見上げると、虫のような巨大な宇宙生物がアイランドーに着地し、大ドームに亀裂が走る。

シエリル「（あれは、バジユラ……?!）」

巨大な蟲、バジユラが放ったビームがいにドームを貫通し、星道館の周辺に着弾する。衝撃波でアルトたちは空中に放り出される。

シエリル「キャーキャー……！」

すぐさまアルトは、ジェットをふかしてシエリルに近づき手を伸ばす。しかし翼に破片が当たり、バランスを崩して手を掠めてしまう。ビル街がすぐそこまで接近している。

アルト「シエリル！腰のジェットで飛べ！早く！」

言われた通り、シエリルは腰のスイッチワイヤーを思い切り引いて、ガスジェットを噴射する。

着地する寸前バランスを崩し、瓦礫の上に投げ出されうめき声をあげる。

天井に空いた穴からは大小のバジユラ達が次々に突入し、街を混乱へと陥れる。

燃えるビルや車列の間をすり抜け逃げ惑う人々。ランカはパニクになった群衆に押しつけられ、倒れこんだ。

アルト「シエリル！」

シエリルを見つけたアルトは、膝裏に腕を入れ、抱え上げたままホッピングする。

アルト「しっかりと掴まってろ！」

爆風やビームを掻い潜り、追ってくるバジユラを狭い路地に飛び込んでやり過ごす。壁の陰で身を低くして辺りの状況を伺う。

ランカ「きゃあああああつ！」

悲鳴のする方に振り返ると、遠くでへたり込んだランカの目の前に大きなバジユラが迫っていた。

アルト「ランカ!?!」

アルト「シエリル、ここでじっとしてろよ！」

駆けつけようとするアルトだったが、すぐ近くの装甲車両にビームが当たり、爆炎で道を阻まれる。

アルト「くそっ！」

「どけー」

アルトの目の前を見慣れない赤紫の機体が通過する。

アルト「なんだあの機体は！」

アルトは目で追いつつ呟いた。

バジユラの目が赤く発光し、恐怖に目をつぶるランカ。

ランカ「やめて…来ないで…いやあああああつ!!?」

ルカ機のモニターが襲われているランカの姿を捉える。

ルカ「オズマ隊長！大変です！ランカさんが…！」

オズマ「なにっ!?!?」

ランカに腕を伸ばしかけていたバジユラの動きがピタリと止まった。

グレイス「フォールド反応…? 一体どこから…」

動きを止めた隙を突き、赤紫の機体がランカを庇うようにバジユラとの間に割って入り、その軀にミサイルを撃ち込んだ。

ミサイルは頭部に命中し、バジユラは倒れ込む。

怯えるランカが恐る恐る目を開けると、そこにはあの時、星道館まで自分を送り届けてくれたのと同じ機体が目の前にあった。

「ランカ！無事か☒」

遅れてオズマ機が現れ、ランカの無事を確かめる。

ランカ「お兄ちゃん！私は大丈夫、この人が助けてくれて…あれ？」

振り返るとそこにはすでにブレラ機の姿は無く、ランカは虚空を見つめた。

オズマ「立てるか、ランカ！俺の機体に乗れ！早くこの場を離れないと」

ランカ「う、うん…！」

シエリルはよろけつつ、アルトの方へ向かおうとする。しかし背後から何者かに腕を掴まれる。振り解こうとして体勢を崩し尻餅を着いてしまう。

「お迎えに参りました、シエリル様」

シエリル「…ブレラ！…何よ今頃！」

頭上からブレラの手が差し出され、シエリルは体をおこす。

ブレラ「…右肩と左足、計7カ所に打撲、大臀部に内出血が見られますが、いずれも軽傷です」

ブレラはシエリルの全身をスキャンし、傷の具合を機械的に述べていく。

シエリル「ちよつと、やめて！勝手に人の体をスキャンしないでつて何度言わせるのよ！」

シエリルは体を隠すように腕を組み、叱責するものの、ブレラ本人は気にすることなく辺りの警戒に意識を向ける。

ブレラ「グレイス女史がお待ちです。騒ぎに巻き込まれる前に帰還します」

無遠慮にシエリルを抱え上げるブレラ。その目は少し先のマンホールをロックし、彼の脳内で進むべきルートが確立される。

ブレラ「最短コースで帰還します」

シエリル「ちよ、ちよつと…！どこから行くつもりなのよ！」

マンホールの蓋を飛ばし、ブレラは中に飛び込む。

シエリル「下水道はやめてええええ!!？」

シエリルの悲鳴がマンホールの下へ遠ざかっていった。

第4話 エンカウント

その夜。

シエリルは充てがわれたスイートルームで泡風呂に浸かっていた。テレビからは数刻前のアイランド1を見舞わった襲撃事件の様子が映し出されている。

キャスター「一連の襲撃事件を引き起こした謎の宇宙生物について、政府は『バジユラ』という命名を発表し、緊急対策組織を設立すると共に——」

シエリルは片足を上げ、アザになった場所を物憂げに見つめる。

ノックの音に我に返り足をおろす。扉に目をやると、マネージャーのグレイスが湿布やらを持って部屋にやってきた。

グレイス「シエリル、具合はどうかしら」

シエリル「どうもこうも…最悪よ。ライブはめちやくちやにされるわ、身体中アザまみれになるわ…」

湯船から上がり、バスローブを身に付ける。今日一日の不満が爆発し、その愚痴は止まらない。

シエリル「あのボディガードどうにかならないの？あたしの体をスキャンした拳銃、下水道なんか私を通らせたのよ!?!」

ボディガードとはブレラのことである。以前にも彼はサイボーグアイでシエリルをスキャンし、憤慨させたことがあった。

グレイス「ごめんなさいね。彼、仕事はきちんとしてやり遂げるのだけど、ちよつと強引なところがあるから。私の方からもよく注意しておくわ」

シエリル「それはそうとグレイス…次のライブの日、押さえられたの？」

呆れたとシエリルを見つめるグレイス。

グレイス「…シエリル、あなたツアーで働き詰めだったんだから少しは休んだ方がいいわ。それに怪我だって…」

シエリル「何言ってるの。私の大切なライブを踏み躪られて、黙っ

てられるわけないじゃない！それに平気よ、これくらい。あたしを誰だと思つて……っ」

シエリルの体がグラリと傾く。

慌ててグレイスが側へ駆け寄る。

グレイス「ほら、言わんこつちやない。体調管理も仕事のうちよ」
グレイスの手を振り解く。

シエリル「わかつてる！でも今は少しでも時間が惜しいの」

グレイス「シエリル……」

髪をかきあげるシエリルはふと違和感を感じて左耳を確かめる。

シエリル「ない……ない！イヤリングがない！」

シエリル「(まさか、あの時……)」

シエリルの脳裏に青い髪を束ねたパイロットの姿が浮かび上がる。

シエリル「……グレイス！ちよつと調べてもらいたいことがあるんだけど……」

翌日。

ランカはナナセやアルトたちと共にカフェ、シルバームーン」に集まっていた。ひとりだけ学校の違うランカのために、放課後こうして集まって談笑するのが日課となっている。

ナナセ「ランカさん、昨日は本当に災難でしたね。うう……ランカさんが無事で本当にどれだけ安心したか……」

ナナセはランカに抱きついた。

ランカ「ありがとうナナちゃん。心配かけちゃったね」

ランカ「それでね……あの時助けてくれたブレラさんって男の人にやっぱりちゃんとお礼したくて、どこの部隊の人かお兄ちゃんとかにも聞いてみたんだけど知らないって言われちゃった」

ナナセ「そうだったんですか……でも、ランカさんのピンチに颯爽と現れるなんて、まるで王子様みたいな方ですね！」

ランカ「王子様か……」

ナナセの一言にランカの胸が高鳴り、頬が赤く染まる。

ナナセ「きゃー！ランカさんったらリングゴみたい我真つ赤で可愛

らしいです!!?」

ランカ「も、もう!!? ナナちゃんつたら!!?」

男子組は二人の様子を少し離れた席で見守っていた。

ルカ「ああ…興奮してるナナセさんもとても素敵です…」

ミハエル「おいアルト、お前グズグズしてられないぞ?」

アルト「は?何が?」

我関せずと、レシートで紙ヒコーキを折っていたアルトは訝しげな眼差しを向けた。

ミハエル「お前なあ…話聞いてなかったのか?このままじゃランカちゃんが、突然現れた王子様みたいな男に取られちゃうかもって話だよ」

アルト「はあ?何だよそれ。第一、俺とランカは別に何とも…」

ミハエル「…ははーん。さてはお前、シエリルに鞍替えしたな?この間男め!」

ルカ「先輩、サイテー…」

アルト「なっ…!違う!なんでそうなるんだよ!」

ミハエルはアルトに胸ぐらを掴まれる。すると胸ポケットの端末に通信が入った。

『俺だ。オズマだ。悪いが今からSMSに出向いてくれないか』

——SMS

オズマ「急に呼び出して悪かったな」

ミハエル「いえ」

オズマ「実は昨日のバジユラとの交戦中、未確認のバルキリーがいたとの報告を受けてな。これなんだが…」

3人はオズマが用意した映像に目を向ける。

アルト「この機体は…!」

反応が早かったのはアルトだった。

オズマ「何か知ってるのか?」

アルト「いや。ランカがバジユラに襲われかけていた時、急に現れてランカを救出した機体だ」

ルカ「それって、ランカさん達が話してた例の…むぐっ！」

ミハエルがルカの口を手で塞ぐ。

オズマ「ん？何か言ったか？」

ミハエル「いえ、なんでも！」

オズマ「どうやら、ランカを…民間人の救出をしたという点から考えて、敵ではないようだが…まだ断定は出来ん。また何かあればすぐ報告をしてくれ」

アルト、ミハエル、ルカ「は！」

夕方。

ランカ「ミシエル君たち、戻って来なかったね」

ナナセ「そうですね。きつと昨日の事件の後処理とか大変なんですよ。もしかしたらそのまま宿舎に直帰したのかもしれないよ」

ランカ「そつか。…あ、もうこんな時間！ナナちゃんごめん、私そろそろお兄ちゃん迎えに行かなくちゃ！」

ナナセ「ええ。ではまた！」

ランカ「♪」

鼻歌交じりにSMSへ続く道を歩くランカ。ふいに後ろから呼び止められる。

「そこのあなた。ちよつといいかしら？」

振り返ると、帽子にサングラスという変装をしたシエリルが仁王立ちをしていた。

ランカ「(わあ、きれいな人…)」

シエリルの変装が上手いのか、単にランカが鈍感なだけか、シエリルであるということは気付いていない様子であった。

シエリル「ちよつと教えてほしいことがあるんだけど…」

シエリルがランカを呼び止めたのは、SMSへの道を尋ねるためであった。ランカも丁度そちらへ向かう所であったため、同行するといふ形になった。

ランカ「私、お兄ちゃんを迎えにSMSへ行く所だったんで丁度良かったです。もしかして、そちらも誰かお知り合いがSMSにいらっしやるんですか？」

シエリル「まあ…そんなとこね」

チラリと隣に並ぶシエリルに視線を向ける。

ランカ「やっぱシエリルさんに似てるなあ…でもまさか、シエリルさんがこんな所で私なんかに話しかけるわけないか」

そんなことを考えていると、パチリと目があった。

シエリル「あなた…シエリル・ノームが好きなの？」

ランカ「え？」

シエリル「さっき…口ずさんでたでしょ？」

ランカ「(き、聞かれてた…!!?)」

ランカは気恥ずかしさで穴に入りたい気分だった。

ランカ「す、すみません…私ったらつい…」

シエリル「あら？恥ずかしがることないじゃない。結構いい声だったわよ。ねえ、シエリルのどんなところが好きなの？」

悪戯っぽい笑みを口元に浮かべ、シエリルが問う。もじもじしながらランカがそれに答える。

ランカ「えつと、歌もダンスも凄いいいつも自信に満ち溢れてて、キラキラしてるるところとか…」

シエリル「それから、それから？」

ランカ「あと、時々インタビューで言い過ぎちゃうところか！」

ガツクシとシエリルがつんのめる。

ランカ「私、シエリルさんに憧れてて、いつかあんな風に歌えたらなって思ってた…でも、才能なんか全然無いですし、無理なのわかってるんですけど…」

シエリル「そうね。あなたには無理だと思うわ」

背を向け、きつぱりと言い放つ。ランカは大してシヨックを受けた様子もなく、やはりという表情で続ける。

ランカ「やっぱり…そうですよね。私なんかが、シエリルさんみたいになんて…」

シエリル「そうやって、私なんかがとか言っている内は絶対に無理
だわ」

振り返り、サングラスと帽子の変装を解いてみせた。

ランカ「うそ…シエリルさん…？ほ、本物☒」

驚きでランカは言葉を詰まらせる。

シエリル「ふふ。こんなサービス、滅多にしないんだから」

第5話 運命の交差点

目の前に現れた、憧れのシエリル・ノーム。ランカはこれが夢ではないかと頬をつねってみるが、変わらない。これは夢ではなく現実なのだ。

シエリル「私はいつだって自分の出来る全てを懸けて、全力で歌い続けてきたわ。それを才能なんかで片付けて欲しくないわね」

シエリルは静かに目を瞑る。

” 銀河の妖精というより白鳥ね。血の滲むような水面下の努力を誰も知らない…”

いつかグレイスに言われた言葉。

シエリル「(そう。私はシエリル・ノーム。銀河トップの歌手手で在り続けるため、必死で歌ってきた…)」

ランカ「あ、あの…シエリルさん？」

突然、黙ってしまったシエリルにランカはおずおずと話しかける。

シエリル「あなた、名前は？」

ランカ「へ!? あ、ランカ・リーです！」

シエリル「そう、ランカちゃんね。あなたには何か…可能性を感じるわ。この私が言うんだから間違いないわ! あなた、歌手になりなさい！」

ランカ「…え！」

そしてランカに近づき、耳元で囁く。

シエリル「私を超えられるぐらいのね♡」

ランカ「あわわわ…!?？」

驚きと緊張で金魚のように口をパクパクさせたままのランカをシエリルは面白そうに見つめる。

シエリル「ふふ…この私を目指しているのならそれぐらいの意気込みでないと困るわ」

ミハエル「あれ? おーいランカちゃん!」

ランカ「あ、ミシエル君、アルト君、ルカ君！」

シエリル「！」

オズマからの呼び出しを終えた3人が、ランカを見つけてやってくる。3人からはシエリルの姿はランカの陰になって見えていなかった。

ミハエル「いやー折角の放課後のランカちゃんとのひと時だったのに、途中で俺たち抜けちやつてごめんね。今終わったところなんだ。お兄さんの迎えだよね？まだ中にいるから……」

ルカ「あれ？ランカさん、そちらの女性は？」

ミハエルの話を遮るようにルカが口を挟んだ。

シエリル「探したわっ！早乙女アルト!!？」

勢いよく指を突きつけられ、アルトは注目の的になる。

アルト「俺っ!!？」

シエリル「ちよつと付き合いなさい！」

アルト「お、おい!!？」

そのままアルトの腕を引いてシエリルはどこかへ行ってしまった。ランカたちは呆然と成り行きを見守っていた。数秒の後、ミハエルが口笛を鳴らす。

ルカ「…今のはシエリルですよね」

ランカ「……」

アルト「イヤリング？」

建物の裏手までアルトを連れ出したシエリルは、要件であったイヤリングの話早速持ち出した。

シエリル「そう！昨日あなたとバジュラから逃げてる時に片方を落としましたのよ。一緒に探してちょうだい」

アルト「はあ？なんで俺が……」

お願いというよりも命令に等しい物言いにアルトは思い切り顔をしかめる。

シエリル「あなたのEX―ギアの移動が荒っぽいせいで落としたんだから当然でしょ？」

アルト「なっ！助けてもらって何だよその言い方！あの時は

俺だって必死に…!」

シエリル「なによ! あんたのせいで無くなったんだから、一緒に探さないよ! あれは…大切なものなのっ!」

よほど大事なもののなのか、シエリルの表情にはいつもの余裕が無い。それを見てアルトは溜息をこぼす。

アルト「あゝゝゝ…わかつたよ。一緒に探せばいいんだろ。けど探すってどこを…」

シエリル「そうね、まずは…」

その時シエリルの胸元が震え出し、谷間から鯛焼きの形をした携帯が飛び出してきた。アルトはシエリルの胸元から慌てて目を逸らす。

シエリル「電話だわ。ハイイ、グレイス。——商談? そんなの後に…え、もう来てる?…もう! わかつたわ…」
ピツ。

シエリル「残念だけど今日の所はここまでだわ…」

アルト「呼ばれてるんだろ、早く帰った方がいいんじゃないか? こつちも探しておくから。見つけたらお前に返しに行けばいいんだろ」

シエリル「…必ずよ! 絶対に見つけて私のところに返しなさい!!? 言いわね!!?」

そう言い残し、シエリルは急ぎ打ち合わせ場所のビルへと向かった。

打ち合わせ場所に着くと、可笑しなサングラスを掛けた男がシエリルを待っていた。

グレイス「お待ちせして申し訳ありません」

グレイスが深々と頭を下げる。

エルモ「いえいえ。銀河の妖精がご多忙ということは重々承知の上です。こうしてお時間を頂けただけで有難いことですから」

エルモ「お初にお目にかかります。私、エルモ・クリダニクというものです」

エルモと名乗った男が名刺をシエリルに差し出す。名刺にはベクタープロモーション代表と書かれていた。

エルモ「早速なのですがシエリルさんに、今度のジョージ・山森監督の映画に出演をお願いしたくて参りました」

シエリル「へえ。映画ね、いいじゃない受けるわ」

二つ返事で了承を出したシエリルは、それと…と、付け加えるように話す。

シエリル「どうせだったら主題歌も担当したいわ。曲はもう決まっているの？」

エルモ「いえ、主題歌の方はまだ…」

シエリル「だったら今から考えるわ」

エルモ「い、今からですか☒」

そう言うなりシエリルはグレイスに譜面とペンを持ってくるように指示する。

シエリル「その映画ってどんな映画なのかしら？」

エルモ「マヤン島を舞台に、鳥の人の真実と——」

シエリル「なるほど南の島ね。照りつける太陽、メラメラ…いやギリギリって感じかしら…」

エルモ「え、えつと…？」

シエリル「静かに！…今降りてきてるのよ！」

エルモを置いてけぼりで黙々と言葉を書き込み出すシエリル。困ったエルモにグレイスがフォローを加えた。

グレイス「ごめんなさいね。あの子、ああなると止まらないから…」

シエリル「出来たわ！曲名はギリギリサマーよ！これを監督に届けてちょうだい！」

それから数十分も経たない内にシエリルは映画のための曲を書き下ろしたのだった。

その頃、家に帰ったランカはノートパソコンに向かい一人悶々と考え込んでいた。

ランカ「(アルト君とシエリルさん…どういう関係なのかなあ…あゝダメ！気になって課題どころじゃないよお)」

頭を抱えるランカ。ふと一つのニュース記事が目にとまる。

ランカ「…ミス・マクロスフロンティアか…」

それまでアルトとシエリルの関係で頭を悩ませていたことなど忘れ、ランカは夢中でその記事の詳細を開く。

ミス・マクロスフロンティアとは、この船団で知らぬ者はいないほど古くからの伝統の祭典である。ランカもいつかはこのコンテストで自身の歌を披露したいと夢に描いていた。

ランカ「そっか、今度の土曜なんだ。…エントリーはまだ出来るみたい…」

”あなたには何か…可能性を感じるわ。あなた、歌手になりなさい!”

シエリルに言われた言葉が蘇る。

ランカ「…よし！」

ランカは意を決して、ミス・マクロスの参加フォームを開いた。

第6話 ミス・マクロス

ランカ「頑張れ自分…頑張れ自分…」

控え室で待つランカは、自分に言い聞かせるようにボソボソと言葉を繰り返す。

「次の方、どうぞー」

ランカ「はひっ!」

ついにランカの番が回ってきた。

ランカ「114番、ランカ・リーですっ!!?よ、よろしくお願いしますっ!!?」

アルト「へえー。じゃあミス・マクロスの予選通過したのか。すごいな」

ランカ「えへへ。ありがとう」

いつものように放課後、ランカたちはカフェ、シルバームーン”でのひと時を楽しんでいた。話題は先日ランカが受けたミス・マクロスの予選で盛り上がっている。

ナナセ「ランカさんの可愛さなら通過して当然です!!?本選も優勝間違いなしですっ!!?」

ナナセが拳を作って力説する。

ランカ「もお、ナナちゃんったら大げさだよお」

ルカ「本選は僕たちみんなで応援に行きますからね!」

そういえばと、ミハエルが思い出しかのようにランカに問う。

ミハエル「ミス・マクロスのことオズマ隊長には言っているの?あの、こういうの、いの一番に反対しそうな感じだけど…」

ランカ「あー…お兄ちゃんには絶対反対されると思ったから黙ってエントリーしちゃった!」

ミハエル「なるほど…」

バレたら大事になりそうだと思ったミハエルだったが、口には出さずにいた。

エルモ「ジョージ監督、シエリルさんの出演OK出ましたよ！それで：彼女からコレを主題歌に使って欲しいと預かってきました」

ジョージ・山森がデモテープを再生する。

ジョージ・山森「……………」

しかし、曲を聴いていた監督にあまり良い反応は無く、首を横に振るばかりであった。

助監督「…監督がおっしゃるには、今度の映画と曲のイメージが合わないそうです」

寡黙なジョージ監督との会話は、いつも助監督を通して行われている。

エルモ「そうですか…弱りましたね。監督のイメージに合う曲が見つかればいいのですが…」

グレイス「もう！言っておいたじゃない。明日はミス・マクロスフロンティアの審査員をするのよって！」

シエリル「ちよ、ちよつと忘れてただけよ。誰かさんのスケジュールがタイトだから…」

仕事を忘れ、外出しようとしていたシエリルはグレイスからお小言をくらっていた。

グレイス「とにかく…今日中に予選通過した子たちの履歴書に目を通しておくのよ！」

シエリル「はいはい」

シエリル「さてと…」

言われた通り机の上の履歴書にザツと目を通していると、見覚えのある顔を発見する。

シエリル「…この子、この間の…ふふ、素直になる事にしたのね」

ミス・マクロス本選当日

「ちよつとオ、なあにあの子」

「あんなツルペタな子が出るの？」

ランカ「……………」

控え室で好奇心な目にさらされながらランカはじつと耐え忍んでいた。しかし周りと自分を見比べて不安は加速する一方であった。

ランカ「(どうしよう…私、場違いな気がする…)」

ナナセ「…ランカさん、ランカさん！」

控え室の入り口でナナセがこつそりランカを呼び出す。

ナナセ「ランカさん、これ、忘れ物です」

ナナセがりボンの付いたリストバンドをランカに手渡す。

ランカ「ありがとうナナちゃん」

「あら？美術科のナナセじゃない。あなたも参加するの？」

二人の前に抜群のプロポーシヨンの女性が姿を現した。

ナナセ「あ、いえ私はランカさんに忘れ物を届けに来ただけです。

ランカさん、こちら芸能科のミランダさんです」

ランカ「ど、どうも」

ミランダ「じゃあこの子が？」

ミランダがランカの体を上から下に見て、クスリと笑う。

ミランダ「ま、せいぜい頑張ったら？無理だと思うけど」

ひらりと片手を上げてミランダが控え室の奥へと消える。

ナナセ「あんなの気にしないでください！ランカさんにはランカさ

んの良さがありますから!!？」

ランカ「ナナちゃん…」

感激でナナセの胸に飛び込もうとしたランカであったが、その大き

さを前にかえってへこんでしまうのであった。

司会者「さあ今年もやってまいりました。ミス・マクロスフロ
ンティア！今年は特別審査員としてジョージ・山森監督と銀河の妖精
シエリル・ノームにお越しいただきました」

ルカ「うわーやっぱり生シエリルは何度見てもいいものですね。さ
すがトップスター」

アルト「ふうん…そうか？」

ミハエル「そうかってお前…」

ルカ「アルト先輩はいいですね。ライブの時シエリルを抱っこし

て飛んでたんですから！それにこの前だって二人きりでどこ行つてたんです？」

アルト「いや、あれは…」

ルカ「あーあ、こつち向いてくれないかなー？」

ルカの思いが通じたのか通じていないのか、その時ちようどシエリルが客席にアルトを見つけ、にこやかに手を振った。

ルカ「あ！今見ましたか!!? シエリルがこつちに向いて手を振りました!!?」

ミハエル「ああ。まずいな…あれは俺に恋した目だったぜ」

アルト「(コイツらアホだろ…)」

ナナセ「もう！もうすぐランカさんの出番ですよ！静かにしててください!!?」

司会者「次はエントリーナンバー7、ランカ・リーさんです!!?」

ステージの上のランカにスポットライトが当たる。

司会者「特技は歌だそうです。では歌っていただきましょう!!? 曲はリン・ミンメイの名曲、『私の彼はパイロット』です!!?」

ランカ「♪」

順調に歌い出したランカ。しかし、突然音が途切れ、観客たちがどよめきだした。

観客「なんだなんだ」

観客「故障か？」

スタッフ「おいどうなってるんだ！

発電機見てこい！」

スタッフたちが慌ただしく駆け回る。

ランカ「(…どうしよう…怖いよ…やっぱり私には無理だったんだ…)」

アクセントに対処しきれず、ランカはその場で立ち竦んでいた。

ナナセ「ランカさん…」

心配そうにナナセが見つめる。

シエリル「(…こんなアクセントで固まっちゃうようじゃまだまだ

ね…私の見間違いだったかしら」

「♪♪♪♪♪」

シエリル「！」

アルト「…なんだ？」

どこからかハーモニカの音色が聴こえてくる。

ランカ「なんだろう…なんだか懐かしい。私…この歌、知ってる…？」

ランカは瞳を閉じ、体の奥から溢れ出てくるように浮かび上がる言葉を口ずさむ。

エルモ「ヤツクデカルチャー…」

シエリル「(すごい…春風みたいにあつたかくてやさしい…まるで、鳥や獣、草、木、花に聴かせているような…)」

ジョージ・山森「…天使の声」

シエリル「!!？」

寡黙な監督が思わず口を開いた。

ジョージ・山森「…心の奥底まで染み渡る癒しの歌…これこそ、私が探し求めていた歌だ…」

シエリルはゴクリと息をのんだ。

シエリル「…間違いないわ。この子は、私にないものを持っている…」

グレイス「すごいフォールド波反応…ふふ。ついに見つけたわ…」
会場の隅で壁にもたれかかりながら、グレイスはメガネを光らせた。

司会者「さあ！いよいよ発表です！今年のミス・マクロスフロンティア映えある優勝は…」

ドラムロールが鳴り響く。

司会者「ミランダ・メリンさんです！」

ステージに上がったミランダにトロフィーが贈呈され、温かい拍手

が送られる。

司会者「そしてもう一人！審査員特別賞に選ばれた、ランカ・リーさんです！」

ランカ「ふえっ!??...わ、私☒」

アルト「行ってこいよ。みんなお前を待ってるぞ」

ランカ「...うん！」

ブレラ「.....」

ステージの上のランカの姿を見届け、そつと会場をあとにするブレラ。その様子をランカは目撃していた。

ランカ「(あれは...ブレラさん?)」

会場を出た長い廊下でグレイスがブレラにすれ違いざまに声をかけた。

グレイス「...疑われるような行動は禁じていたはずだ」

ブレラ「.....」

背を向けたままブレラが足を止める。

グレイス「ランカ・リーにフォールド波反応を確認した。これより彼女をコードQ1と称し、次の作戦へと移行する」

グレイス「Q1の監視には他の者をあたらせる。お前は今まで通りシエリルの護衛につけ」

ブレラ「なっ...」

ブレラの抗議にグレイスが応じる様子はなかった。

グレイス「返事はどうした？」

ブレラ「...了解」

コンテストの後、ランカはすぐに会場を飛び出してブレラの姿を探していた。しかし、その鳶色の髪を見つけることは出来なかった。

「ランカちゃん」

名前を呼ばれ振り返ると、シエリルがこちらに歩んで来た。

シエリル「審査員特別賞、受賞おめでとう。あなたの歌、心が震えたわ」

ランカ「あ、ありがとうございますっ！あのとき…シエリルさんがああ言ってくれたから一步踏み出せました」

シエリル「…ふふ。ランカちゃんの実力でしょ」

でも…とシエリルは続ける。

シエリル「どうしてあなたがアイモを知っていたの？」

ランカ「アイモ…？」

シエリル「さつきあなたが歌った歌よ。あれは私が小さい頃、母から教わった思い出の歌なの。母は祖母から、祖母はどこかの惑星で聴いた歌だと言っていたわ。…もしかしてランカちゃんもその惑星に…」

グレイス「シエリル、ここにいたの。そろそろ帰るわよ」

シエリル「グレイス…ええ、わかったわ。ランカちゃん、続きはまた今度ね」

ランカ「え、あ…」

シエリルとグレイスが立ち去った後、アルトが遅れてやってきた。アルト「ランカ。シエリルと何話してたんだ？」

ランカ「ううん…なんでもないよ」

車で移動中、グレイスはミラー越しにシエリルの顔を一瞥した。

グレイス「…なんだか嬉しそうね、シエリル」

シエリル「そう？」

シエリルはランカという自分の最大のライバルになるであろう存在に胸の高鳴りが抑えられずにいた。

シエリル「真の伝説はこれから始まるってこよ」

グレイス「どういう意味？」

シエリル「ふふ、わかるわよ。そのうち…ね」